

笑いを媒介にして接合される「歴史」と現代

THE History and the present which are joined through laughter

道合裕基

Doai Hironori

京都大学大学院人間・環境学研究科

1Graduate School of Human and Environmental Studies, Kyoto University

【要約】 高校までの「歴史」の授業で学習する事件・人命等の用語を現代の文化と結び付けて紹介する「カノッサの屈辱」という番組がかつて放送されていた。そこでは、本来は何の関連性も見出せない「歴史」と現代文化を用語の発音や意味内容等の類似性に基づき、ゆるやかに結び付けていた。その結合術は、「笑い」を媒介にしており、受験以外では、ほとんど使うことがないであろう「歴史」に関する知識を巧みに利用している。本稿は、この「カノッサの屈辱」に見られる「歴史」に関する知識の利用を知識創出の実践の一つとして捉え、その「笑い」を媒介とした結合術の諸相について考察し、「教材」としての可能性を提案するものである。

【キーワード】 カノッサの屈辱 歴史 笑い 結合術 (アルス・コンビナトリア)

1. はじめに

現在、高校までの教育課程において「日本史」や「世界史」といった「歴史」に関する科目を学習することになっている。しかし、そこで学習する「歴史」についての知識は、「歴史」に対して興味を持っている人以外は、受験のために仕方なく覚えなければならない無味乾燥な膨大な用語群にすぎない。この「歴史」に関する知識を「笑い」を媒介として、現代の文化現象に結び付けて活用した番組として「カノッサの屈辱」が挙げられる。本稿は、以下に「カノッサの屈辱」における「歴史」と現代文化現象との結合の諸相とその「教材」としての可能性について考察していくことを目的とする。まずは、考察を進める上での前提となる「カノッサの屈辱」の概略を述べた上で、その「歴史」と現代との架橋法の諸相を見ていくこととする。

2. 「カノッサの屈辱」について

「カノッサの屈辱」は、1990年4月から1991年3月まで、毎週月曜日の24時40分から25時10分にかけてフジテレビ系列で放送された番組である。この番組中においては、「クイズ」、「チョコレート」等の現代の文化現象を大学での歴史の講義風に展開しており、番組の進行役として俳優の故・仲谷昇を歴史学の「教授」という設定のもと起用し、毎回異なるテーマを「講義」として採り上げ、「期末試験」、「卒業試験」等の回が放送される等の凝った番組構成になっていた。また、放送された24時40分から25時10分という時間帯にもかかわらず、平均6パーセントの視聴率（「出席率」と番組内では、呼ばれる）を獲得しており、番組終了後に東京池袋西武百貨店で、「カノッサの屈辱展」が催されたほどの人気を誇った。その後、2007年には、携帯電話の歴史を採り上げたスペシャル版が放送されている。なお番組名は、「世界史」で学習する1077年、教皇グレゴリウス7世に神聖ローマ皇帝ハインリヒ4世が破門解除を乞うた事件に由来するが、番組

内容とは直接の関連性はなく、「歴史」をパロディ化した番組であることから「歴史」で学習する用語でインパクトの強い用語である「カノッサの屈辱」が、番組名に選ばれた程度の意味合いしかない。

上記のような番組に関する予備知識を踏まえた上で、具体的に「歴史」と現代の文化現象がいかに擬えられ、結び付けられているかをいくつかの事例を挙げて、概観していくこととする。

3. 「歴史」との接合の諸相

3. 1 「形態状の類似性」による接合

「カノッサの屈辱」において「歴史」と現代の文化現象を接合するにあたり、両者の類似性の発見が重要になっている。以下に類似性の発見の際に参照される項目別に具体例を挙げて紹介する。まずは、「カノッサの屈辱」における接合法として「形態状の類似性」に着目した事例を見ていく。

例えば、アイスクリームの歴史を扱った「アイスクリーム・ルネサンス史」の回では、番組冒頭部分において、高校までの「日本史」の授業で学習する古代の文字を記した薄い木の棒である「木簡」と現代の「アイスクリームの棒」をその形態状の類似から繋げる。そこでは、両者が同じく木製の板で、文字が書かれているという共通点で結び付けている。「木簡」に関する歴史学的説明に付け加え、「アイスクリームの棒」に記された「アタリ」、「ハズレ」、「ヒット」等の文字をト占の名残ではないかという歴史的事実とは異なる説明を付与している。但し、最初の方に「木簡」に関する「正しい」説明を述べ、後半に「オチ」となる説明が成されるため歴史的事実を誤認しないようになっている。

また、自動車の歴史を扱った回では、導入部で、ラスコーやアルタミラの壁画を「集落の結束を高め、狩猟での繁栄を祈願した呪術的性格を帯びていた」と紹介する一方で、日本の暴走族の手による「^{みなごろし}麿」や「^{ジョーカーズ}情可垂達」と書かれた「落書き」を「集落の結束を高める」ための「壁画」と言い換える。「なぜ彼らが、このような難しい漢字を知り得たか歴史学上の謎である」と説明し、こうした社会に対する投げやりな態度と「^{どうろこうつうほう}道路交通法」を破る活動を「^{こうきんらん}交禁の乱（^{こうきんらん}黄巾の乱のもじり）」と呼ぶ等と次の節で触れるような「言葉の類似性」に基づく説明を付加している。こうした「形態状の類似性」に基づく接合は、映像媒体であることを活かしており、映画・演劇等で形態の類似したもので画面の展開を繋いでいく「グラフィック・マッチ」の手法と重なる。佐伯順子は、泉鏡花の映画化作品を論じる中で、この「形態状の類似」の多様とその効果について言及している。（佐伯，2000）「カノッサの屈辱」においても本来は、何の関連性も見出せない事象を「形態状の類似性」により結び付けるという「グラフィック・マッチ」的手法が使用され、その無関係な両者が結び付けられたことで視聴者に「驚き」や「笑い」を与えている。

3. 2 「言葉の類似性」による接合

次に「言葉の類似性」に基づく接合の事例を見ていくが、この事例が最も多く番組中に登場する。「歴史」の用語と「同音」であるという点に注目し結び付けるものや中には強引な単なる「駄洒落」のレベルに留まるものも存在するが、後述する用語の「意味内容の類似性」と重ねることで、「駄洒落」からの飛躍を試みている。例えば、ビールの歴史を日本史における幕末維新史に擬えた「幕末ビール維新」の回にこの傾向が顕著である。

「^{ぼくふ}幕府」の表記を、ビールの原料である麦の字に変換した「^{ぼくふ}麦府」から始まり、「^{いっつき}一揆」を一気飲み「^{いっつき}一気」に置き換えたりしている。また、「^{しんせんぐみ}新撰組」をビールの商品名である「^{しんせんぐみ}新鮮組」に置き換えて紹介する一方、「^{こうぶ}公武合体策」を「^{こうぶ}キレがあるのにコクがある」という「^{こうぼがつたいさく}酵母合体策」というように「言葉の類似性」に基づく「駄

洒落」的展開を繰り広げている。更に、チョコレートの歴史を扱った回では、「白鳳文化」^{はくほうぶんか}、「国風文化」^{こくふうぶんか}といった用語を空気の入った「エアインチョコ」が隆盛した「白泡文化」^{はくほうぶんか}、チョコフレーク等が台頭した「穀風文化」^{こくふうぶんか}といった紹介がなされて、番組の後半部分では、チョコレートの舌触りを各社が競った戦いを「壇ノ浦の戦い」^{だんのうら}に擬え、「舌の裏の戦い」^{したかいかい}と表現し、「平氏一門」^{へいしいちもん}に擬した「明治一門」^{めいじいちもん}（明治製菓を指す）が衰退したというように説明される。このように「カノッサの屈辱」は、「駄洒落」に関してベルクソンが述べるように、一つ一つは単純な「言葉遊び」にすぎない「駄洒落」を何個も重ねることで齎される笑いの効果を高めている。（ベルクソン、1976）「言葉の類似性」に基づく接合だけであれば、「笑い」を引き起こす量は増幅するが、「駄洒落」のレベルを超えるものではない。そこで、以下に述べるような「意味の類似性」に基づく接合と「言葉の類似性」は併せて使用されることが多く、「駄洒落」からもう一段階発展させ、接合法のレベルを磨いている。

3. 3 「意味の類似性」による接合

前節で概観した「言葉の類似性」と重なる点があるが、「意味の類似性」に基づく接合法についての事例を以下に採り上げる。まずは、比較的結び付けることが容易な日本の戦国時代を「お笑い」の歴史に擬えた「戦乱の世・お笑い武将の萌芽と栄華」の回を紹介する。ここでは、織田信長に反旗を翻し、成功した明智光秀が、すぐに討ち取られたことを示す「明智光秀の三日天下」^{あけちみつひで みっかてんか}を芸人ぼんちおさむを明智光秀に擬し、北野武の番組の裏番組でレギュラーを獲得したが、すぐに番組が打ち切りになったことを「織田ケ氏」^{きたのたけし}に謀反を起こした「ぼんち光秀の三日天下」^{みつひで みっかてんか}というように説明される。「ぼんち光秀」と「明智」の駄洒落は苦しいが、「三日天下」の意味する内容との類似性でカバーし、その後の説明で「織田ケ氏」^{きたのたけし}は、天下を取ると思われたが、「撮叡山」^{きつゑいざん}焼き打ち（フライデー襲撃事件を指し、比叡山^{ひゑいざん}焼き打ちと掛けてある）^{ひゑいざん}を行い、失脚したと述べられる。

また、クイズの歴史を西洋思想史の展開に重ねて説明する回では、番組冒頭で、人類最古の「謎」として有名なスフィンクスの問いが紹介される。その後、現代の司会者・久米宏を哲学者ソクラテスに擬えた「ソクメラテス」を登場させ、解答者にヒントを与え、正解に導く様子を「問答法」と呼び、解答者の個性の強さ、主に珍解答を述べるのが正解率よりも重視される風潮を「無知の知」と説明する。このようにソクラテスについて学習する「問答法」や「無知の知」といった用語を意味内容の類似性を用いて、かつて放送されていたクイズ番組「ぴったしカン・カン」における司会者・久米宏やその番組での様子等を繋いでいる。つまり、ソクラテスとソクメラテスという段階においては、単なる「駄洒落」にすぎないが、ソクラテスが真理探究の際に用いた「問答法」の意味内容をクイズ番組における正解へと導くためのヒントとの類似性を見出し、結び付けていることで、「駄洒落」よりも一段階高めているのである。

他にも思想家ルソーの「自然に帰れ」という言葉を「倉本聡」^{くらもとそう}作のドラマ「北の国から」とを結び付け、「倉本ルソーは、「北の国から」で、主人公の素朴な語り口を通して、「自然に帰れ」と説いた」というような説明や和田勉演出のドラマ「阿修羅のごとく」^{あしゅら}を偏見に満ちた人々を描いた和田ベーコンの「イドラのごとく」と置き換えた説明が成される。ここでは思想家ベーコンの唱えた偏見を指す概念「イドラ」を駄洒落で繋ぎ、ドラマのタイトルとその演出家名に置き換えている。しかも、その説明は、ただ単に「駄洒落」で繋ぐだけでなく、「イドラ」という用語の意味を含んだものとなっている。このように、「意味の類似性」を見出し、「歴史」に関する知識と現代のクイズやドラマ等の知識との接合を実践していた。

4. 接合術（法）についての考察

今まで、「カノッサの屈辱」において見られた「歴史」と現代文化との接合において参照される項目毎に事例を挙げて概観してきたが、以下にその接合術に関する考察を行う。

異なる事象同士を繋ぐ方法として、美術史における「マニエリスム」の技法がよく知られている。ここでは、本来結び付くことのない事物が同一の画面上に結び付けられており、その手法は、後の「シュールレアリスム」の手法と重なることが多く、ロートレアモンの「手術台の上で、ミシンと蝙蝠傘が会う」という言葉に両者の特徴がよく捉えられている。こうした「マニエリスム」の特徴は、よく一言で「アルス・コンビナトリア（接/結合術）の美術」と表現される。（スタフォード、2006、高山、2007）この「アルス・コンビナトリア」（接/結合術）の手法は、文化人類学における構造主義の理論とも重なる。例えば、構造主義の代表的な人類学者レヴィ＝ストロースの有名な著作『野生の思考』は、三色スマレの絵が表紙になっている。一見するとただの装丁のようだが、これは、原題の「パンセ・ソバージュ」（野生の思考）と「パンセ・ソバージュ」（三色スマレ）が同音であることに由来する一種の「掛け言葉」になっている。（小田、2000）つまり、本来は、何の関連性もない「三色スマレ」と「野生の思考」とがその「言葉の類似性」（同音）によって結び付けられているのである。このような「言葉の類似性」（発音に基づく）による接合法は、全てを紹介出来た訳ではないが、「カノッサの屈辱」において多くの事例が見られた。ここでは扱う対象が異なるが、「歴史」の用語とビールやチョコレート等の現代文化に関する用語が結び付いていた。本来は、関係性を見出すことの難しいもの同士を繋げ、「驚嘆」（驚異）をもたらすという「マニエリスム」の精神との親近性が浮上してくるのである。

また、こうした「類似性」を重視する思考様式は、神話等の起源譚における説明部分にこの傾向が顕著である。小田亮は、神話の比較研究について述べた論考の中で、日本の連句の事例を挙げ、ゆるやかな連想に基づく結合術について説明している。（小田、1994）神話は、動植物・人類の文化や世界の起源について「手近な材料」を使い、形態・色彩・意味等の「類似性」に基づいてゆるやかな連想による説明を行うという性質を持つ。（佐佐木、2007）例えば、筆者が調査したアイヌの動物起源譚について見れば、シシャモという魚は、ヤナギの葉が変化したものだから形状がヤナギの葉に似ているというような説明が行われたり、ライチョウはサケが変化したものだから外見は似ていないが、ライチョウの肉の味はサケの味がするといったように魚類と植物、鳥類と魚類といった本来であれば、結び付かないもの同士を「類似点」（形態・味覚等）を発見し、結び付けて、説明を行っていた。（道合、2010）アイヌの事例では、身近な動物について説明する際に、同じく身近な動植物を用いるという「ブリコラージュ」（器用仕事）としての性格を帯びていた訳だが、この結び付け方は、「カノッサの屈辱」における「類似点」を発見し、関係のないものを繋ぐという実践と扱う対象こそ異なるが、神話における接合法には、共通性があることが窺える。

このように「カノッサの屈辱」において見られた「歴史」と現代文化の接合には、「形態」、「音声」、「意味」等の「類似性」を発見し、繋げるという手法が用いられていた。それは、単なる「駄洒落」ではなく、「マニエリスム」の技法に顕著な「繋げることで、驚嘆させる」という精神と重なり、結合術（アルス・コンビナトリア）を現代において実践した先駆的な試みだと言え、また構造人類学における「ブリコラージュ」（器用仕事）とも重なる。つまり、「歴史」の用語という知識と本来は重ならない現代文化の用語とを組み合わせる実践とみなすことが可能となる。

5. 「教材」としての可能性と活用

「カノッサの屈辱」に見られる結合術の諸相についての考察を進めてきたが、次に「カノッサの屈辱」を「歴

史」学習の教材として活用する試みについての考察に移ることとする。

石川県金沢市角間町にある金沢大学の共通教養科目として毎年開講される日本の神仏習合史を扱う「宗教学 C」の講義の最後の回において「カノッサの屈辱」が利用されており、クリスマスの歴史を「化学史」に擬えた回を活用している。また、2007年度には、文学部専門科目として「カノッサの屈辱」を7回程度扱った「宗教文化論」の講義を行っている。講師は、金沢大学人間社会学域准教授で日本思想史専攻の清水邦彦先生で、地藏信仰史や水子供養の専門家として有名である。(1)「宗教学 C」の受講者は、例年50～60人程度で、少ない年は30～40人程度となり、「宗教文化論」は、30人程度であった。ここでは、「カノッサの屈辱」を扱った「宗教学 C」の講義の最終回と「宗教文化論」の講義の受講者の反応を紹介する。講義方法は、前者・後者共に、「カノッサの屈辱」の映像を受講者に見てもらい、理解補助のためのプリントで補うという形式である。「宗教文化論」の講義は、前半の7回で日本の「宗教文化」を扱い、後半の7回で「カノッサの屈辱」を活用するという形式で行われた。戦後から平成の日本を「宗教」と「文化」の面から考察することを授業目標に掲げており、このことは、「宗教学 C」における授業目標である「日常、見過ごしている事例から研究の発端を見つけること」とも連動していた。また、一方的な講義にならぬように毎回、出席確認の代わりに受講者に感想・意見を書いてもらっていたが、その感想を見ていくと以下のような結果が得られた。

- (1)「宗教文化論」の講義では、最初に、番組についての概略を説明してから視聴してもらう場合と概略を説明せずに視聴してもらう場合とでは、説明をしない方がより笑いを生みやすい。要は、インパクト重視の「出オチ」的性格を帯びる。
- (2)また、番組内で扱われる「歴史」が、「日本史」で学習する内容の方が、笑いを生みやすく、「世界史」で学習する内容を扱うと元の「世界史」の用語自体に馴染みがないケースが見られた。
- (3)「宗教学 C」において、この授業は、「単位は取りにくいだが、面白い」という意見やまだ受講していない人に「受講を勧める」という答えが見られた。
- (4) また、クリスマスと化学史を扱うため、意外と理工系の学生の反応は良い。

課題としては、「カノッサの屈辱」が、「歴史」学習の教材として、全ての回が活用可能という訳ではないことが挙げられる。しかし、そこで採り上げられる現代文化現象の変遷史に関する雑学的知識を獲得するという点では、どの回もよく整理されたものとなっており、E・H・カーの『歴史とは何か』からの一節「歴史とは過去と現在との対話である」(カー 1962)を番組の理念として持ち出し、偏りは見受けられるものの現代の文化現象と「歴史」に関する知識を「笑い」を媒介として接合し、過去の出来事にすぎないと思われがちな「歴史」の知識を身近なものにしていた。この「カノッサの屈辱」の接合法は、「歴史」学習が「無意味なものである」という主張の根拠として挙げられる「現代の私達に何の関係もないから無意味である」という言説に対する抵抗の手段としての性質を帯びてくる。「歴史と現代の架橋」が希求されている中において、(萩野 2011)「類似性の発見」により結び付けられた直接は関連性がない「架空の歴史」とその中で展開した現代の身近な文化現象の変遷史を辿ることが、「歴史」に対する興味・関心を醸成する入り口となる可能性をもつ。

中には、「歴史」の学習には、「笑い」等の不純物は必要ないという主張もあるだろうが、「歴史」に対する入り口としては、「笑い」を媒介とした紹介法が、入りやすいように思われる。例えば、ある現在の「歴史」学習に対する強い「問題意識」を持つと主張している研究者が、広く「歴史」に関心の無い人々にも興味を持ってもらうために、旅行家イザベラ・バードの著作から異文化交流史を考察するといった授業を行っていた。(2)

しかし、その「歴史」学習による啓蒙を目指す深い問題意識は伝わるかもしれないが、元々「歴史」に興味・関心を今まで持っていない受講者にとってイザベラ・バードは、入りやすい入り口とは言えない。少なくとも、あまり「馴染みのない」内容から入るよりは、「笑い」を媒介とし、現代文化と架橋した「カノッサの屈辱」から「歴史」の初歩を学習した方が入りやすいように思われる。現に「単位は取りにくい、面白い」という意見が見られることから興味を持つに至る受講者がいることは確かである。

今後、大学の教養課程だけではなく、中学校や高校での初歩の「歴史」学習の補助教材として活用・実践し、その受講者の反応や関心を持つきっかけとなるか否かの調査が課題となる。

6. おわりに

これまで、「カノッサの屈辱」を題材として、その番組内において「歴史」に関する知識（事件や人名、用語等）を関連性を見出せない現代の文化現象とをいかに結び付け、利用しているかを採り上げてきた。ここでは、単なる音の類似性に基づく「駄洒落」のレベルから歴史用語と現代文化の用語との意味内容、または、「木簡」と「アイスクリームの棒」の例に見られるような形態の類似性に基づいて繋ぐ「言い換え」のような接続法を行っていた。その結合法は、基本的には受験でしか使用することがないであろう「歴史」に関する知識を「笑い」を媒介として活用しており、「マネエリスム」や構造人類学の結合法との共通点が見られた。その結果、「日本史」、「世界史」の概略的理解に資する所があり、そこで扱われる現代の商品文化史に関する「歴史」や雑学的知識についても学習することが可能であった。これは、番組の理念としてしばし、言及される E・H・カーの「歴史とは過去と現在との対話である」という言葉と繋がり、現代文化の変遷史を通して、結び付けられた「歴史」という過去との対話を部分的に可能としていた。

しかし、「カノッサの屈辱」は、「歴史」を学習する上での興味を持つきっかけとして資する所はあるが、膨大な「歴史」での学習範囲の全てをカバーするものではない等の課題も併存している。今後は、「カノッサの屈辱」を補助教材として有効活用出来るように他の教材と組み合わせることが求められる。(3)

注

- (1) 金沢大学国際学類・清水邦彦先生（日本思想史・地蔵信仰史研究）の「カノッサの屈辱」の教材化の実践に依る。清水先生には、本稿を作成するにあたり、有益なアドバイスをいただいた。
- (2) 批判的に言及しているため、実名を挙げることは避ける。但し、イザベラ・バードの著作の翻訳・紹介等の研究についてではなく、興味を抱ききっかけとしての妥当性に疑問を呈していることを付記しておく。
- (3) 番組中で「現代」の事象として取り上げられていることが、番組放送から20年以上経過したことで、「過去」の出来事になってしまい、受講者が若いとその関連知識に関する説明等が必要になる等の事態が生じる。例えば、俳優・勝新太郎が勝海舟に擬えた「勝新舟^{かつしんしゅう}」という人物が登場し、「咸臨丸に乗って、ハワイを目指し、そのまま帰って来なかった」という説明がなされるが、勝新太郎が、ハワイにおいて覚醒剤所持で逮捕されたという事件を知らないという意見や勝新太郎自体を認知していないということから「笑い」が生まれにくいという事例がある。

参考文献

- 小田亮 (1994a) 『構造人類学のフィールド』世界思想社。
小田亮 (2000b) 『レヴィ=ストロース入門』筑摩書房。

- カー・E・H (1962) 清水幾太郎訳『歴史とは何か』岩波書店.
- 佐伯順子 (2000) 『泉鏡花』筑摩書房.
- 佐佐木隆 (2007) 『日本の神話・伝説を読む—声から文字へ』岩波書店.
- スタフォード・バーバラ (2006) 高山宏訳『ヴィジュアル・アナロジー—つなぐ技術としての人間意識』産業図書.
- 高山宏 (2007) 『近代文化史入門 超英文学講義』講談社.
- 道合裕基 (2010) 『アイヌの動植物観におけるアナロジーと表象』金沢大学大学院人間社会環境研究科 修士論文.
- 萩野美穂 (2011) 「歴史教育の役割—「歴史」と「自分」を架橋するために」長野ひろ子・姫岡とし子編『歴史教育とジェンダー 教科書からサブカルチャーまで』青弓社, pp. 166-177.
- ベルクソン・アンリ (1976) 林達夫訳『笑い』岩波書店.
- 山田美保子 (2004) 『カノッサの屈辱』扶桑社.

連絡先

住所: 〒606-8501 京都府京都市左京区吉田二本松町 京都大学大学院人間・環境学研究科

名前: 道合裕基

E-mail: doaimari@almond.ocn.ne.jp